

備える。

準備。予備。整備。装備。守備。警備。
そなえる…用意する、そろえる、用心する
防備。常備。完備。不備。具備。兼備。
そなえ…したく、用意。警戒。防衛
備品。設備。備蓄。備忘。備忘。
そなわる…準備ができる、身に付く
●●●ソナエ アレバ ウレイナシ!!

no. **5**

かわさき
防災広報紙

昭和59年11月30日発行
編集・発行：
川崎市土木局防災対策室
〒210 川崎市川崎区宮本町1番地
TEL.(044)200-2111内線2841



「グラツ」とききたら、火の始末

大地震のとき、最も恐ろしいのは火災です。

61年前のあの関東大地震でさえ、建物の倒壊などの揺れ自体による犠牲者は、2000人くらいといわれています。それが、東京の下町などを襲った大火災の発生によって、50倍の約10万人もの火災による犠牲者を出すことになってしまったのです。

その原因となったのは、昼食の準備に各家庭で使っていた「火」です。

地震の被害を少なくするためには、まず、市民一人ひとりが火を出さないこと、そして、万一火災になっても、はやいうちに消火すること—これが最も大切なことです。

大地震の際は、まずわが身の安全をはかり、すばやく火の始末をすることを心がけましょう。そのためには、ふだんから

◎どんな小さな地震でも火を消す習慣をつける

◎火気を正しく使うように心がける

◎町内会・自治会(自主防災組織)などが行う防災訓練に積極的に参加し、消火方法などを身につけておく

—などの点に十分心がけておきましょう。

自分も用心!

日々の用心!

「地震火災に備える」

これから冬に向かつて、火気を使う機会が多くなります。毎日の暮らしの中で火災を防ぐ努力を積み重ねることが、地震火災を防ぐことにつながります。

ふだんからの注意点

- ① ストープやコンロ・レンジなど火を使う器具に故障や欠陥などがないか点検する
- ② ストープやコンロ・レンジなどの上方やまわりに、衣類、紙、カーテンなど燃えやすいものを置かない
- ③ 天ぷらなどをコンロにかけたまま、その場を離れない。※ちよつとでも離れるときは、必ず火を消す
- ④ コンロなどのガス器具は、使い終わったら器具栓だけでなく、元栓もしめる
- ⑤ ペンジン、塗料、灯油など危険物の入った容器は、倒れたら

り、落ちたり、割れたりしないように、火元から離れた場所に安全に保管する

特に、東海地震の発生が予知(警戒宣言が発令)されたときには

★なるべく火を使用しない。使うときは最小限の個所にして、その場を離れない

★可燃物が落ちたり、倒れたりする危険のある部屋で、ストープなどを使わない

★消火器やバケツを用意し、風呂に水を張っておく。消火器の使い方を確かめる

★プロパンガスボンベは倒れないように鎖などで固定してあるか確かめる

町内会・自治会(自主防災組織)などで、防災訓練を実施しましょう。

各区役所総務課、消防署にご相談ください。

消火器の使い方



「地震防災二声運動」の実施を!

「火はだいじょうぶですか」「けが人はいませんか」と、地震のときに、となり近所で声をかけ合う地震防災一声運動は、火災の防止に結びつき、地域の安全に大きな力となります。町内会・自治会で防災訓練を行うときには、この地震防災一声運動を取り入れて行いましょう。

★応急手当... レッスン⑤ 人工呼吸

呼吸が止まった!

呼吸が止まった人には、心臓が止まる前に一刻も早く人工呼吸を実施しなければなりません。時間が経過するにつれて、脳の中の酸素が不足して、ついには死に至ります。呼吸は、溺水、窒息、ガス中毒、過度の暑さ寒さにさらされたとき、感電、頭部損傷などの場合に停止することがあります。

● 気道(空気の通り道)を確保する
意識のない人は、舌がおちこんで気道がふさがり空気が通らないことがあるので、片手で額をおさえ、もう一方の手を首の下(後頭部寄り)にさし入れ、頭をそらすようにして気道を開通させておきます。



関東大震災・横浜駅付近(大震災写真集・神奈川県・復刻版より)



後頭部をそらせ気道確保

下あごを上にあげ気道確保

口中や気道に異物があれば取り除きます。

● 呼吸の有無をしらべる
気道を確保したまま、自分の頬と耳を患者の口に近づけて、呼吸を感じたり、胸の動きを見たり、触れたりして素早く判断します。呼吸が止まっていたら、ただちに人工呼吸を開始しなければなりません。

人工呼吸

気道を確保したまま、額をおさえ、手の親指と人さし指で、患者の鼻をつまみます。

自分の口を大きくあけて、患者の口のまわりにかぶせ、患者の胸が軽くふくらむまで息を吹き込みます。

口を離して自然に呼吸をさせます。自分の頬、耳を患者の口に近づけて呼吸を確かめ、胸の動きを見て、効果的に行われていることを確かめます。

最初の4回を続けて吹きこみます。そのあとは、大人の場合5秒に1回のリズムで繰り返します。

ボサイ



体験談その5

関東大震災 大正12年(1923) 「11時58分」

(臨港消防署編)から
[川崎市南部り災者の声]
梶川金蔵さん(当時19歳)
川崎区殿町3-22-18

ちょうど昼ごはんを食べているときに起きました。私は、はしを持ってすっ飛び出しました。私の家は、農家と海苔をしていたのです。海苔の時に使う竹の棒に乗って見ていました。ものすごかったですよ。家が、海の波のように上がったっていました。ですから家のひさが、外から立ってつかめたぐらいに家が揺れました。

南の方からゴーと音がしてきて空が真赤になり、すごかったです。殿町では、50軒ぐらいある町内で6、7軒倒れたぐらいではないでしょうか。あとは、物置とか炊き場とかは倒れましたね。私も家

の炊き場が倒れるのを見るなり飛び出したんですから。なにしろ壁が、ぼろぼろ落ちて、上の上のっているあらゆるものが落ちましたからね。南風でしたので6尺ぐらいのトタンが、葉っぱのようにぶっ飛んできました。横浜の空や東京の空は、昼でも夜でも一面火事で真っ赤でした。

余震が続いていたので、家の中には入れず外で寝とまりました。木のところは、根がはっているので、地割れはないので安全だからいい木のそばに家族で寝ました。余震は1週間ぐらい続きました。地割れは7~8mぐらいの長さで雷の光が通ったみたいに割れていました。そこから青い砂が吹き出していましたね。けが人はいないようでしたが火災は1件だけあった。(中略)

1週間ぐらいたって赤坂にいる親戚に行ったが、東京は全部といっていいくらい焼けてしまっていた。川に飛び込んだ人たちが、死んでしま川に死人が多く上がっていて、とても口では言えないほど無残であった。(以下略)

